掲載日:2014年06月13日，面名:社会，記事ID:KIJ20140613_M003100120AD08001
(C)新潟日報社

世界遺産目指す「佐渡鉱山群」

新穂銀山 構成に含めず

県・市「金」に絞り価値明確化

2017年度の世界文化遺産登録を目指す「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」について、県と佐渡市が作成している推薦書案の構成資産に新穂銀山を含めないことが12日、分かった。金の生産体制に絞ることで、佐渡鉱山の価値を明確にする。

従来は新穂銀山を含め、相川金銀山と西三川砂金山、それと相川金銀山の発見につながった鶴子銀山の4鉱山を構成資産として検討してきた。

県と佐渡市によると、すでに世界遺産となった石見銀山（島根県）との差別化を図るため、400年以上続いた金の生産に焦点を当てるべきだと判断した。新穂銀山は金山との関連を示す資料が乏しいとされる。

県世界遺産登録推進室の北村亮室長は、08年に岩手県の「平泉」が「普遍的価値の証明が不十分」として構成資産の再検討を求められた例を挙げ、「構成資産が多くなると価値を証明しにくくなる。石見銀山との違いを明確にし、金を強調したシンプルな物語を作りたい」と説明する。

市世界遺産推進課の安藤信義課長は新穂銀山の学術的価値を認めつつ、「地元の熱意を無駄にしないため、国の史跡指定に向けて調査を続けたい」とする。新穂地区の関係者の中には「やむを得ない」との反応がある。

佐渡金銀山は、10年に世界遺産の国内候補として暫定リストに記載された。県と同市が提出した推薦書案を基に、国が最終的に推薦書を決定し、国連教育科学文化機関（ユネスコ）に提出する。

世界文化遺産は候補が多く、登録は年々狭き門になっている。近く登録が正式決定する群馬県の「富岡製糸場と絹産業遺産群」も構成資産を絞り、歴史的な価値を一つの物語として明確に示したことが奏功したとされる。

推薦書案の構成資産から外される新穂銀山の坑道跡「百枚間歩」＝11日、佐渡市新穂地区